



第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会

イブニングセミナー 3

日時 2022年4月23日(土) 18:00~18:50

会場 かがしま県民交流センター第4会場
(大研修室2 東棟3F)

開催形態 ハイブリッド開催 ▶ <https://jocd38.jp>

※ご視聴の条件、方法につきましては、学会 HP にてご確認をお願いします

患者中心の乾癬診療について 考察する

座長

日野皮フ科医院

日野 亮介 先生

演者

18:00~18:25

西日本乾癬レジストリの患者背景から考える
乾癬患者のアンメットニーズ

北九州市立八幡病院 皮膚科

鶴田 紀子 先生

演者

18:25~18:50

患者ニーズに基づいた乾癬治療選択

旭川医科大学病院 国際医療支援センター

本間 大 先生

共催：第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会
アムジェン株式会社 メディカルアフェアーズ本部

西日本乾癬レジストリの患者背景から考える 乾癬患者のアンメットニーズ

北九州市立八幡病院 皮膚科 鶴田 紀子 先生

乾癬診療において、患者自身が自分の状態をどのように捉えているかを理解することは重要である。重症度に対する認識やQOLはその典型的な例であり、患者自身が自分の状態を重いと捉えていればいほど、治療に対するニーズも高くなると考えられる。では、患者の考える重症度やQOLを把握するうえで大事な点は何であろうか。最近まで報告された海外の調査では、客観的指標である皮疹の面積(BSA)を基準にすると乾癬患者の8割はBSAが3%以下と皮疹が限局していた一方、それらの半数以上は自身の状態を中等度～重症と認識していたと報告されている。また、頭皮や顔面、爪などの特殊部位病変に皮疹を有する患者ほどQOLが悪化していたという結果もある。従って、BSAに代表される皮疹の見た目のみで判断するのではなく、患者との対話や皮疹の部位を考慮することが重要であるとされている。これらの傾向は日本人乾癬患者でも同様だろうと予測できる一方、データをもって確認することは重要である。

我々は、日本人乾癬患者の疾患・治療実態を把握することを目的に、西日本乾癬レジストリ(WJPR)を構築した。大学病院や総合病院、乾癬を専門とするクリニックが参加して2019年8月から登録を開始した。対象はこれまでに全身療法を受けたことがあるもしくは今後検討している乾癬患者で、2021年12月時点で1,800名を超える乾癬患者が登録されている。基本的な患者背景や併存疾患に加え、BSAやPGAといった医師側の指標、更にはDLQIやPaGAなどの患者指標も含めて追跡調査している。登録患者の背景データでは、上記の海外からの報告と同様に、8割に近い患者はBSA 3%以下と限局型の皮疹を有している。本発表では、WJPRの患者背景から考えられる日本人乾癬患者の重症度やQOLの傾向を紹介しつつ、乾癬患者のアンメットニーズについて考察する。

患者ニーズに基づいた乾癬治療選択

旭川医科大学病院 国際医療支援センター 本間 大 先生

詳細な分子病態の理解が進むことにより、近年、乾癬に対する有効性の高い治療選択肢が飛躍的に増加した。特に、経口薬、注射剤を用いた全身療法により、これまで十分な治療効果が得られなかった難治症例においても、寛解導入が現実のものとなりつつある。現在、全身療法の適応については、皮疹重症度や関節炎を代表とする合併症の有無に応じ、臨床の現場で判断されており、必ずしも明確な基準は存在しない。

一方、皮膚科医による治療選択と患者満足度の間にはギャップが生じることが報告されており、実際の診療においては、このようなギャップを埋める工夫が必要である。患者が各治療法に対して求めるニーズについて理解したうえで、十分な患者満足度が得られるような治療法を選択することが重要である。このためには、利便性や薬効の強さ、安全性、医療費など、治療において重視する項目について、医師と患者間で十分にすり合わせを行いながら、より理想的な乾癬治療に近づけることが求められる。

本講演では、国内外の文献等における乾癬治療に対する満足度の調査報告とともに、旭川医科大学乾癬外来におけるアンケート調査の結果を紹介し、乾癬患者のニーズに沿った局所療法・全身療法の使い分けについて考察したい。